特集　伝統芸能を継承するために

もう一度、つなぎたい絆

「川根本町に伝統芸能ってあるの？」
徳山区に伝承される「徳山の盆踊」がユネスコ世界無形文化遺産に登録され、
祝福の声が上がった一方で、時代や生活の変化に伴いその存在すら知らない人が増えています。
しかし、そのような伝統芸能を知らないままで良いのでしょうか。
本号では、徳山の盆踊を取り巻く人たちの活動を紹介しながら
伝統芸能の保存・継承について考えます。

夜の祭りが本来の姿 その熱気こそ感じてほしい

徳山古典芸能保存会副会長の澤本等（さわもとひとし）さん。昭和62年に同保存会に入会して以来、徳山区の古典芸能を支えています。「祭りは人と人の絆そのもの。もう一度、つなぎたい」。地域への思いを語る澤本さんに話を聞きました。

▲ 澤本等さん。現在は徳山古典芸能の伝承者代表も務めている

担い手不足 伝承の危機

「僕たちが踊っていた頃は、地元の青年団で祭りを盛り上げていたよ。地域の人たちの応援もすごかった」。懐かしみながら澤本さんは口を開きます。

徳山の盆踊は、毎年8月15日、徳山区の浅間神社で奉納されている国指定の重要無形民俗文化財で、同地区に伝承されている徳山神楽と並ぶ、川根本町の伝統芸能の一つです。第2次世界大戦終戦直後にも執り行われたほどで、毎年絶えること無く受け継がれてきました。

昨年11月、全国の伝統的な盆踊りや念仏踊りで構成される風流踊（ふりゅうおどり）の一つとして、ユネスコ無形文化遺産に登録されるなど、その存在価値が高く評価されています。

「世界的な話題になったことは喜ばしいが、現実は盆踊も神楽も担い手がいなくて、毎年継続することも難しい」と澤本さんは続けます。

徳山の盆踊も他の古典芸能と同様に、少子高齢化に伴う人口減少から、伝承者不足に悩まされています。

「地域に人が少なくなって、『祭り』自体を負担に考える人が増えた。それに加えて保存会も高齢化して、若い世代が芸能や祭りについて何を考えているか分からない。彼らの意見を聞ける機会がほしいけど、なかなか集まれない」と歯がゆさをにじませながら澤本さんは話します。

本物の祭りの熱気を感じて

それでも、保存会には現在、若い世代の移住者をはじめ、地域内外の若者が入会し、伝承の一翼を担い始めています。

「一度でも祭りの熱気を経験した人なら盆踊の貴重さを分かってくれる。新しい伝承者を増やすためには、祭りの熱気を体験してもらうことが一番。近年のコロナ禍で規模を縮小した祭りではなくて、夜まで続く活気にあふれた本物の祭りに参加してほしい」。

今年は新型コロナウイルスの影響によらない、従来の祭りの開催が期待されています。

▲数十年前の「徳山の盆踊・鹿ん舞」一行
二十歳を迎えた青年が中心となっていた

失われた絆を再びつなぎたい

澤本さんは「祭りは地域と地域、人と人とをつなぐ絆。地域ににぎわいや活気が少ないのはコロナ禍だけが理由ではない。根本的に地域のつながりが薄れかけている」と危機感をにじませ、「芸能を形式的に伝承することはできると思う。でも、神事を含む芸能と祭りを地域全体で一緒に盛り上げたい。参加する誰もが楽しみながら次世代につないでいくために、もう一度、地域とのきずなをつなぎたい」と話し、保存会の今後の活動に力を込めました。